

〈資料〉

## 「市場と僧院：南アジアと東南アジアにおける交易 ディアスポラ・マナンギー」の紹介（前編）

山本 真弓・高田 峰夫

（受付 2012年10月30日）

### はじめに

以下に提示するのは、プリスタ・ラタナブルック著『市場と僧院：南アジアと東南アジアにおける交易ディアスポラ・マナンギー』（ハーバード大学に提出した博士論文、2008年4月）<sup>1</sup>の紹介である。ネパールから国外への人の移動が多いことは良く知られている。最も良く知られている例は、いわゆる「ゴルカ兵」であろう。また、近年では日本にも多数のネパール人が来住し、「インド」料理店等を経営している姿を見かけることも間々ある。しかし、ネパールからの移住者が東南アジア各地に多数いることは、研究者の間でも、その事実さえほとんど知られていない。当然、それらの人々についての研究も、一部の例外を除き、これまでほとんど行われてこなかった<sup>2</sup>。ネパールから東南アジアへ移動する人々についての民族誌学的研究である『市場と僧院』は、この点で非常に価値が高い。それこそが、ここに紹介する所以である。

本稿は、資料の紹介部分を山本が、そして、「はじめに」と解説部分を高田が、それぞれ執筆担当した。また、脚注は主に高田が、一部は山本が、適宜付した。なお、『市場と僧院』は長文である。要約的な紹介とはいえ、かなりの分量になる。そのため、前編と後編の2回に分けて紹介を行う。本稿は、その前半部分である。

- 
- 1 詳細な原著情報は以下の通り。“Market and Monastery: Manangi Trade Diasporas in South and Southeast Asia”, A dissertation presented by Prista Ratanapruck to The Department of Anthropology in partial fulfillment of the requirements for the degree of Doctor of Philosophy in the subjects of Anthropology, Harvard University, Cambridge, Massachusetts, April 2008
  - 2 高田・山本 [2011], 高田 [2012] は、この空隙を埋めようとする努力の一部である。なお、本稿は科学研究費（基盤研究 B）「タイに陸路で渡ってきた南アジア系及びミャンマー系移民：地域研究の新たな地平を拓く」（代表：高田）の助成を利用した研究の一部を成す。

## 1. 資料紹介

### i) 解題

広範囲にわたる人の移動と文化の交流は、歴史学でも文化人類学でも注目されて久しいが、そこにアジアの交易者たちの営みは含まれていない。それは、18世紀からの植民地主義の伸張と領土拡張のせいである——マナンギーの営みに注目した著者プリスタ・ラタナプルックはそのように述べる。マナンギーとはネパールのマナン溪谷<sup>3</sup>に住む（住んでいた）人々の末裔を指す。

言わずもがなだが、歴史学も文化人類学も西洋人の眼差しから出発した学問である。著者の国籍は明示されていないが、論文の後半部で描かれている著者とマナンギーたちとの交流の記述から、タイ出身の女性であることが推察される。

この論文は著者が2001年から2005年にかけて行ったネパール、チベット、インド、ビルマ、タイ、マレーシア、シンガポールのフィールドワークに基づいている。著者が詳細な検討を加えているのは、〔1〕外国に点在するマナンギーたちが交易活動の最中に異国で寝泊まりする場所、〔2〕現地社会に根を下ろしている個々のマナンギーたちの活動、〔3〕郷里（ネパール国内）での集まり、の3点である。

〔1〕は、単にそこで寝泊まりするだけでなく、情報収集や個人の私物（商品）の保管なども行われるという意味で、まさに交易の【拠点】であるが、同時に、そこへ行くと口に合う食事が供され、顔馴染みや知り合いのそのまた知り合いに会えるなど、心の【拠り所】ともなっている。そして、この【拠点】【拠り所】というのは、長年郷里を留守にしている交易者たちにとって、ネパール国内にもまた、必要とするものなのである。〔3〕はこの点に留意して、ネパール国内での祭事、行事の役割に注目している。〔2〕で焦点を当てるのは〔1〕と〔3〕の結び目とも言える役割を担う人々である。これら3点がそれぞれの章を構成して、以下のような目次になっている。

はじめに

#### I 外国で結びつくための拠点／拠り所

##### ①交易に従事する者たちの共同体

交易するディアスポラ

歴史的背景～移りゆく交易ルート

---

3 マナン（Manang）溪谷は、ネパール中西部の観光都市ボカラから北方、ヒマラヤ山脈南麓に位置する溪谷地帯。このマナン溪谷の住民、及び、その出身者は、ネパールで「マナンギー」（Manangi, マナン人）と総称される。したがって、これは民族名ではなく、内部に複数の民族等を含む。ただ、主要民族は「グルン」であるようだ。また、この地域の住民は基本的にチベット系の山地民である。

行商

「身を守る」ための費用

A Funduq

②マナンギーの宿場

始まりの頃～現地のパトロンたち

ホテル、そして宝石卸売り業者が提供する寄宿舎

現地女性と結婚する

II ひとつの土地での経済循環、そして地域と地域をまたぐ経済循環

③移動から定住へ

地元の生産品

他所者との結婚と、文化的他者を包摂する親戚関係

④ネワールの交易従事者

2組の兄弟

雲南出身の妻と現地生産物

⑤ネパールへ、再投資

カトマンズで

マナン渓谷で

交易か、信仰か～揺れる心

III 郷里で結びつくための拠点／拠り所

⑥資力と労力の提供、心の安らぎのために

徳を積む象徴的行為

ナンディになること～徳を積む行為のひとつ

個人、世帯、そしてひとつのポリス

⑦共有財の蓄積～仕事と遊びのために

メタ祭～村をあげての賭け事

ピクニック～制度化された家族の集まりと確認の場

家族訪問はお勤め

本稿ではII-③までの内容を紹介する。II-④はマナンギーとの比較のためにネワール<sup>4</sup>を紹介した部分なので省略し、II-⑤以降は次回に紹介することにした。以下の文章は、筆者（山本）が内容を取捨選択しつつ筆者の言葉でまとめており、抄訳や逐語訳ではないこと、また取捨選択に際しては研究史や著者が用いた文化人類学の先行研究の理論的枠組み及び著者自身の理論化の部分は割愛していることを予めお断りしておきたい。なお、筆者が重要だ

4 ネワールはカトマンズ盆地の先住民族と言われており、独自の言語（ネワール語）と宗教（ネワール仏教）をもつ。また、その内部はヒンドゥー・ネワールと仏教徒ネワールに分かれ、それぞれが独自のカースト制度を持つ点で、ネパールの他の民族とは異なる。チベット交易の従事者としても知られ、かつてはラサとカトマンズ盆地の両方に妻を持つネワールの男も少なくなかった。この点は文学作品のテーマにもなっている。なお、ネパール語で「ネパール・バサ」はネワール語を指し、ネパール語は「ネパーリー・バサ」という。

と思うところには、【】をつけている。

ii) 『市場と僧院』(要約的紹介)

はじめに

個人にとっても社会にとっても、物質的富の飽くなき追求が、非物質的目的と根っこで結びついていることは珍しくない。この論文の目的は、長年の間、広い範囲にわたって交易活動を営んできたマナンギーと呼ばれる共同体について、【その活動を支え、推進する価値は何か】を明らかにすることである。マナンギーは、数世紀にわたってキャラバン隊を組んで、インドとチベットのあいだで塩や穀物などを交易してきた。もともとはネパールのマナン溪谷に住んでいたが、今ではネパールのみならず、南アジア、東南アジアの至る所で、宝石や工芸品を扱う熟達した貿易商人として、あるいは飛行機会社の大株主、ホテルや工場、不動産の所有者として活躍している。

マナンギーは様々な社会を股に架けて交易活動に従事するうちに、赴いた先の地元女性と結婚し、インドや東南アジアに根付くようにもなっている。その結果、マナンギー共同体の広がり、現在、ヒマラヤ地域から東南アジアにまで及ぶ。男性人口の5分の1が僧院で暮らすこの共同体は、僧侶の生活を支えるだけでなく、祭事や年中行事といった社会的宗教的催しを遂行するだけの経済余剰を生み出してもいる。

この論文では、経済的富を追求し続けながら同時により高い次元の非経済的目的を達成するために、マナンギー共同体が駆使している【社会の仕組み】や【思考方法】を検討する。

2000年7月、タイのチェンマイ<sup>5</sup>にある観光地<sup>6</sup>を歩いていた私(プリスタ・ラタナブルック―筆者注)は、ネパール語のおしゃべりにびっくりして振り返った。アンティークや工芸品を扱う店で3人の男がおしゃべりしていたのだ。2人はいところ同士で、残りは彼ら2人と姻戚関係にあった。いところ同士のひとりが店のオーナーで、あとのふたりはインドとネパールから店に置く品物を調達している。チェンマイに来るようになって、少なくとも30年は経つという。オーナーは今日までの経緯を語ってくれた。

最初は歩道に布を広げてインドから持ってきた石やネックレスを売ったこと、それからタイ女性と結婚し、チェンマイに定住。そして、店を構え、親戚の者が外国から品物を仕入れてくるようになったこと。「タイにネパール人がたくさん住んでるの?」「バンコクに

5 タイ北部の中心都市であり、観光地。

6 恐らくは、チェンマイの市内東部に位置する観光名所「ナイト・バザール」周辺。「ナイト・バザール」中心部にはアンティークショップや工芸品を売る店が集中する一角があり、ここではネパールやチベットの土産物が売られていることを筆者(高田)が確認している。

いっぱいいる。もっともマレーシアやシンガポールの方が多。数百人はいるよ。ほとんどは行ったり来たりしてる<sup>7</sup>。いろんな物を売買しながらね。地元の女と結婚したのもある。」「それ、いつ頃から？」「俺の記憶じゃ、短く見積もって、じいさんの頃からだなあ。」これがマナンギーとの出会いだ。（2頁）

異文化間を往来する交易集団の研究はこれまでもなされてきたが、マナンギーの実態は明らかにされてこなかった。その理由のひとつに、彼らがインドのパスポートを持っていたことが挙げられる。大英帝国の臣民を偽装していたのだ。この他にも、記録（文献資料となるもの）がないとか、人数が少なくて注目を集めなかったとかいうこともあるだろう。

マナンギーは国境を跨ぐ複数の地域を行き来して交易してきたが、それが現在に至るまで維持されているのは、キメ細かに編み込まれた共同体内部の繋がりがあからである。マナンギーは単なる交易のための共同体ではなく、むしろ、交易は共同体の性質の一部にすぎない。ヨーロッパの諸帝国は交易の拡大によって政治的野望を成し遂げていったが、マナンギーの場合は、交易活動の背後にもっと大きな文化的志向が存在するのである。

ここで、二つの問いを提起して置こう。

- [1] マナンギー共同体は地理的に拡散しており、また、共同体が外部者と密に関わりをもっているにもかかわらず、「ひとつの共同体」として維持できているのは、なぜか？
- [2] マナンギー共同体は一カ所に集中して住んでいるわけではなく、また、同じ文化や伝統を共有することさえない（こともある）のに、互いが互いを同じ共同体のメンバーだと認識するのは、なぜか？

以上の2点を明らかにするために、この論文ではマナンギーが集まる場所に注目する。

Iでは、交易に従事するマナンギーの男たちが、互いに違う国々を往来しながら、どのようにして共同体を形成していくのか、その過程を明らかにしている。

マナンギーの男たちは別々に交易活動をしていても要所要所で集まって情報交換をし、協力し合う。そのような要所に彼らは宿場を築き、現地社会の支援を得るべく地元の人々との関係を構築するのである。さらにそこで、各自の必要経費を節約するために、共同で使える資金を蓄えてもいる。この相互依存は、絶えず移動している男たちを結びつけ、他の共同体に対してマナンギー共同体の競争力を維持するのに役立っている。

IIでは、交易に赴いた先で地元女性と結婚し、そこで家族を形成したマナンギーに焦点をあてている。

---

7 この点は、彼女の過少評価・過少申告であり、誤解を招きかねない。タイ在住のネパール人、ネパール系子孫の数は、少なく見積もっても万単位であり、数万との主張さえある。また、バンコクのみならず各地に多数が定住している。その概要は、高田・山本 [2011]、高田 [2012] を参照。

このような結婚は国境を挟むふたつの地域を、経済的かつ社会的にどのように結びつけているのだろうか。というのも、このような結びつきが可能になるには、個々人が同時にふたつの共同体に属す必要があるからだ。結論を言えば、彼・彼女ら自身が拠点／拠り所となり、【人々に居場所を提供する役割を担う】ことによって共同体内部に組み込まれる。ここでは、外国に定住したマナンギーの男たちと、ネパールから交易に出かけてくるマナンギーの男たちとの相互依存関係が観察される。

交易に出かけた先の女性と結婚せずに、ネパールに帰ってきた男たちは、郷里で再び集まって祭事や年中行事を担う。彼らのなかで、帰国後の郷里での祭事や年中行事と、かつての外国での交易活動とは、どういう関係にあるのだろうか。Ⅲでは郷里ネパールでの活動に焦点をあてる。

彼らは外国では、宿場形成や売り場の共有などを通して資金を貯める。一方、帰国後は首都カトマンズで、祭事や年中行事を組織して、労力と資力の両方を確保する。その目的は【徳を積む】ことであり、【家族の繋がり】を再確認してさらに強化することである。ここで再度浮上するのが、相互依存という関係性だ。

重要なのは、マナンギー共同体内の相互依存関係が現世利益のためだけではなく、自らの死後も見据えた精神的なものまでを含んでいることである。マナンギー社会は、経済活動と非経済活動が有機的に結びつくことによって、領土も軍隊ももつことなく、共同体の維持を達成しているのである。

## I 外国で結びつくための拠点／拠り所

### ①交易に従事する者たちの共同体

マナン渓谷は著しく降雨量が少ないため、作物が十分育たないという厳しい自然条件下にある一方で、地政学的にはまったく異質な環境下にあるチベット高原とガンジス平野を結ぶという利点をもっていた。マナンギーはプリティビ・ナラヤン・シャハのネパール統一（18世紀）後、その支配下に入る見返りに、交易上の特権（免税）を得た。これは実に1977年まで続いている。また、1960年代に初めてネパールのパスポートをもって国外に出たのもマナンギーである。マナンギーとネパール政府との関係は、公言されることこそないが、植民地と宗主国のようなものだった。

今日、マナンギーの大多数はマナン渓谷に住んでいない。さらに、かなりの人々がインド、タイ、マレーシア、シンガポールなどの国外に出ている。彼らは19世紀末あるいは20世紀初頭までカトマンズ経由でチベットとインドへ交易に出かけていた。当時の記録はほとんど残っていないものの、チベットでは周辺部の農村を交易しながら歩いていたようだ。インドはベナレス（ヴァラナシ）、パトナ、ゴラクプルなどガンジス平野の中程まで出かけていたらしい。

しかし、このルートは20世紀初頭に衰退していく。ヤングハズバンド遠征隊に伴って登場した新しいルートは、チュンビ渓谷を通るシッキム経由でインドからチベットへ抜ける道である<sup>8</sup>。この新ルートの登場と共に、マナンギーはインド、ビルマ、マレー半島へと進出する。植民地支配による都市の交通網の発達、ゴルカ兵駐屯地の開設、マラヤへの貿易拡大など、マナンギーは植民地支配を利用しながら交易地を拡大していった。

たとえば、彼らはネパールのパスポートをもって「ネパール人」としてビザなしでインドへ行き、チベットで仕入れた岩塩、薬草、麝香をカルカッタで売った。1920年には、デリーとジャンムー・カシミール<sup>9</sup>で仲介業を営み、イギリス支配がアッサムに及ぶとカルカッタ港から外国製品を引き上げて内陸地のアッサム、ブータンでとれる産品と交換した。こうして彼らは、山岳ルートと海洋ルートを繋いでいく。

1930年、ビルマのモゴ<sup>10</sup>の宝石鉱山とマンダレーのネパール移民およびメイミョー<sup>11</sup>のゴルカキャンプの話の聞きつけたマナンギーは、イギリス船でカルカッタからラングーンへ渡り、イギリス支配の拡大と歩調を合わすように、カルカッタからラングーン、パナン、シンガポール、マドラスにまで足を伸ばしてカルカッタへ戻って来た。1960年ビルマの軍事クーデターとカルカッタ・シンガポール・バンコク間の航路開通で、再度ルートを変更することを迫られ、ベトナム戦争中はラオス、ベトナムへも出かけた。

マナンギーの交易版図とヨーロッパ人のそれを比較すると、資本家 vs. 行商人といった構図が浮かんで来る。前者は国家の後ろ盾があり資本も潤沢だが、後者はそのいずれももっていない。しかし、それに代わるものとして、外部社会との関係構築および現地女性との結婚による外部の内部化が見られる。

ヨーロッパ人が来る前、アジアでは地方と地方を結ぶ行商が盛んだったが、研究者はこの事実注目しなかった。そのため、アジアの貿易はヨーロッパ中心の経済史のなかでしか描かれてこなかった。

アジアの行商の特徴は、行商人が複数存在していて、そのなかの誰一人として市場を独占する者がいなかったことである。また仮にいたとしても、大多数の小さな行商人が繰り広げる交易版図を塗り替えるまでには至っていない。このような状況にヨーロッパ人が武装して乗り込んできてアジアを支配したのである。

ヨーロッパ人とマナンギーとの違いは何だろうか？ それは武力で土地の人々を支配する

- 
- 8 インド東部のシリグリから（ネパールとブータンの間に位置する）シッキムのガントークを抜け、チベット南部のチュンビ渓谷を経てラサへと向かうルート。
  - 9 インド北部の州で、ネパールより、かなり北西に位置する。同州ラダック地方のレーを經由してチベット西部へ抜けるルートはインドとチベットの間の主要交通路の1つ。
  - 10 モゴ（Mogok）はビルマ中部の主要都市マンダレーの北に位置する。ルビー等の宝石の産地として有名。
  - 11 メイミョーは、マンダレーの東部に位置する小都市。

のか、それとも土地の人々とよき関係を結ぶのか、という点である。

フンドック (*funduq*) と呼ばれる人々<sup>12</sup>がいる。交易に際して、行商人に様々な便宜を提供する土地の人間だ。たとえば、行商人の泊まる宿、倉庫、販売所、事務所、居酒屋や娼館などで、地中海、ヨーロッパ、アジアにも居たようだが、16世紀の大航海時代の始まりとともに衰退していった。マナンギーが交易する地域にもちょうどフンドックのような役割を果たす人々が存在するが、以下の3点でフンドックとは異なる。第一点は、土地の人間の助けを借りることがあるとはいえ、基本的に自分達のなかからフンドックの役割を果たす者を出していること、第二点は、土地に根付いて姻戚関係を結ぶことがあること、第三点は、現地に根を下ろしたマナンギー世帯はマナンギー共同体の相互依存関係に包摂され、かつその関係を強化すること、である。そして、土地の女性と結婚したマナンギーはその土地に同化せず、マナンギー共同体のなかに居続けるのである。

## ②マナンギーの宿場

マナンギーの節約方法は、土地の人々と親しくなることである。どんなふうにして親しくなるかという、たとえば初期の頃の拠点だったシク寺院では、彼らは寺院を掃除し、その見返りとして寺院の一角に泊めてもらう。あるいはレストランで野菜を刻むなどの労働力を提供した結果、寝泊まりすることを認めてもらう。そうやって親しくなるのだ。以下は、マレーシアの The Ai Goh Hotel について、Nurba から聞いた話である。

「祖父は商売が上手かった。インドからビルマ、タイ、マレーシアを経てシンガポールまで行ってマナンまで戻るのがたったの3ヶ月という記録の持ち主だ。ビルマのジャングルは危険で、特に戦争中はマラリアや、時には銃撃されて命を落とすこともある。祖父と友人は死体をかきわけて歩いたそうだ。靴が破けると死体の靴を失敬して履いた。死ぬことを考えると怖いものなどなかったという。ビルマを出てタイに着くと、マレーシアまで南下し、シンガポールに行き着いたら最南端で陸の終わりだったそうだ。シンガポールへはインド経由で行くことも可能だが、インドのパスポートをもってなくちゃならない。祖父は当時もってなかった。後に、アッサムのシロン<sup>13</sup>で友達に手配してもらったらしいけど。このルートはイギリス船に乗ってカルクッタからラングーンへ行き、そこからペナンへ行く。祖父はビルマの宝石を持って行って、マラヤで売ったそうだよ。ペナンではシク寺院に泊まれるんだ。

12 ここでは「フンドック (*funduq*) と呼ばれる人々」とあるが、これは著者(プリスタ・ラタナブルック)がこの語の原義を知らなかったことによる、誤用であろう。本来「フンドック」はアラビア語で「隊商宿」、いわゆる「キャラバン・サライ」のことを意味する。本来の用法について、詳しくは羽田正『隊商宿』『岩波イスラーム辞典』(岩波書店) pp. 592-593、及び湯川武『フンドック』『新イスラーム辞典』(平凡社) pp. 436-437、参照。

13 インド東部、アッサム州とバングラデシュの間に位置するメガーラヤ州の州都。ここでは、メガーラヤ州がアッサムから分離する以前の時代を語っているため、「アッサムのシロン」となっている。

僕が父と初めてベナンへ行商に行ったときもそこへ泊まった。宝石を入れた袋を腰に括りつけて寝るんだよ。僕らはよく寺院の掃除をしたから喜んで泊めてくれた。だから、どこへ行ってもまずシク寺院を探したものだよ。」

「少し余裕ができるとホテルに泊まるようになった。今とは違うオーナーだった。世代交替してるけど、僕らはずっとそのホテルに泊まってる。3代目かな、今は。全部中国人だよ。僕らは定期的に泊まるので、そのうちオーナーと懇意になってね。僕らがみんな一緒に泊まれるように、大部屋をひとつ空けてくれるようになった。その部屋は、何人泊まっても、一人当たり10リンギット<sup>14</sup>でいいんだ。たった2人でもその大部屋に入れてくれて、1人10リンギット。その大部屋は僕らのための部屋で他の人を泊めてなかったんだよ。なので、ドライマとカルパナの写真を祀った。オーナーはこの部屋を Room Number G って呼んでた。G はグルンの G。マナンギーに多い名字だから。」

「ベナンは僕らの基地なんだ<sup>15</sup>。宝石を売るというだけではなくてね。僕らはここからイポー (Ipoh)、アロースター (Alor Star)、コタバル (Kota Bahru)、クランタン (Kelantan) へトンボ帰りで出かけて戻って来る。ここで洗濯させてもらえるし、日曜日なんかは台所だって使わせてくれる。オーナー自ら料理して僕らと一緒に食べることもあるんだ。」

第二次世界大戦前にマナンギーの拠点はシンガポールのシク寺院からマレーシアのホテルに移っていた。このホテルがシク寺院と違う点は、ホテルの Room Number G はマナンギーのためだけの居場所として存在していることである。そして、オーナーとの関係もすこぶる良い。だから、異国での予期せぬトラブルからオーナーが彼らを守ってくれる。観光ビザで商売しているため、地元警察からの賄賂の要求もあるが、ここに居る限りそういったことから身を守れるのだ。それもこれもオーナーとの長年にわたる信頼関係故である。

ベナンでマナンギーが築いているいい関係は、ホテルのオーナーだけではない。ある宝石店のオーナーともそういった関係を築いていた。売れ残った宝石を安全に金庫に保管して置いてくれるのだ。ひとつの金庫にマナンギーたち全員の宝石を、所有者の写真と一緒に各自の袋に入れて保管する。ここで宝石が紛失したことはない。これが可能なのは、マナンギー相互の信頼関係と、マナンギー社会と宝石店のオーナーとの信頼関係があるからだ。このよ

14 または「リンギ」(Ringgit) はマレーシアの貨幣の単位。

15 ベナンについては重松 [2012] が詳しい。なお、同書 [42-43] には1980年のマレーシアの国勢調査による民族構成が詳細に記されているが、「インド系」の中にも「その他」の中にも「ネパール人」は含まれていない。ちなみに、「インド系」の中には「シク (パンジャブ・シク教徒)」や「パングラデシュ人」「パキスタン人」が含まれている。「インド系」の中には「その他のインド系」カテゴリーがあるので、恐らくはこの中に「ネパール人」(マナンギーを含む) が入れられている可能性は残る。しかし、それ以上にありそうなのは、彼らがベナンを、いわば「ベースキャンプ」として利用しているだけで、ベナンには定住して「フンドック」の役割を果たす者がいない可能性であろう。

うな信頼関係を形成するには【「リスクをとる」覚悟】と、【信頼関係をじっくり育てる意志】が不可欠で、そうやって一度形成された信頼関係は実に多くのものをもたらしてくれる。

マナンギー社会の助け合いと経済的なやりとりの基礎となっているのは、【親族関係に依拠した相互依存と義務の遂行】である。そのため、外国に行ってその土地の女性と結婚することは、マナンギーが拠点／抛り所を形成するうえで極めて重要である。次は妻の協力を得てシンガポールに拠点／抛り所を築いたニーマの例を挙げよう。

ニーマは1980年代末にシンガポールへ来た。当時は皮製品を週末の市で売っていたが、看護婦をしている妻と知り合ってから、妻の協力を得てブギス・マーケット (Bugis Market) に売り場を借りるようになった。そこで扱う商品の幅を広げた。その頃にはマナンギーがシンガポールにも来るようになっていて、彼らはある簡易宿に泊まっていたが、安宿とはいえ、他の地域に比べて安くはなかった。ニーマはみんなで一緒に利用できる宿場が必要だと考えるようになった。ちょっと立ち寄るだけだったり、滞在期間が定かでない者もシェアできるような場所の確保である。シンガポールはマレーシアに行く直前の商売の地で、宝石が高く売れる場所だ。手工芸品を扱う業者にとっても卸売り市場として貴重だし、輸入税の高いマレーシアに入国する直前の場所でもある。滞在期間はせいぜい2～3日から、長くても2～3ヶ月である。

ニーマが準備した宿場は1階がマットレスを並べた雑魚寝の場所。一人当たり一晚という単位で宿泊料をとる。上の階は自分達家族の住まいと、比較的長く滞在する者に個室を貸す。運営はマナンギーの女達が三ヶ月交替で担う。料金の徴収、調理、洗濯などである。通常は、シンガポールに来る男の妻や姉妹、男の妻の姉妹が担う。なぜマナンギーの女が交替でその役割を担うのか？ 理由はふたつある。ひとつはビザの問題である。計3ヶ月の観光ビザを一ヶ月ずつ2回延長してからバンコクなど国外へ出る。おそらくもっと長く滞在する方法があるのだろうが、あえてそうしない。それが二つ目の理由で、交替でシンガポールに来る方が多くの女達に機会がめぐってくるからである。【平等主義と機会の再配分】というマナンギー社会の考え方を反映していると言える。彼らのいつものやり方で、常に【一定の制約を自らに課す】。

このやり方は高度な協力関係と創造性、信頼関係を前提としてはじめて可能なものだ。およそ200人ものマナンギーがシンガポールを通過する際に宿代を支払って行くのだから。さらに商品である宝石を預けてもいくわけだから、信頼関係の確かさには相当なものがある。ただし、彼らが特別な人間だというわけではなく、信頼関係が成り立つような社会構造になっていると言った方がよい。つまり、すべての者が互いになんらかの姻戚関係で結びついており、3世代前にまで遡って互いを知っていることや、誰がどこで何をやっているかが皆に知れ渡っていることなどである。これは単に、何をやっているかや、誰がどういう人柄でどん

な性格かというだけでなく、その懐具合や健康状態に至るまで【情報を共有】しているのがある。これらの前提条件なくしては、このようなシェアは成り立たない。

シェアはコスト削減のためだけでなく、【出会いの場と情報交換の機会】も提供している。シンガポールの宿場の壁には、タイ、マレーシア、インドなどマナンギーが出かける土地の拠点／拠り所となる場所や人の連絡先を一覧表にして貼ってある。その一覧表の最後には、地元の電気屋、航空会社、ピザの宅配、中華料理のテイクアウトなどの電話番号もある。このほか、ニーマがシンガポールで他のマナンギーのためにしていることは、車で空港まで迎えに行き、出入国の手続きに支障が出ないようにすることである。そうすることで、出入国に必要な時間も短縮できるし、荷物の紛失や税関通過の際のトラブルも未然に防ぐことができるからである。

この章の最後に、現在のマレーシア、クアラルンプールにあるシェアの例をふたつ簡単に紹介しておく。

ひとつは、かつてはコーヒーショップだったところをマナンギー自身が借りて運営している例である。そこには25脚ほどのテーブルがあって、それぞれに宝石を並べ、売り場になっている。これを2人が2ヶ月交替で借りて商売をしているのである。理由はピザの期限が限られているからで、ペタリン（Petaling）通りにある2軒のコーヒーショップを合わせると、およそ100人のマナンギーが「店」を出していることになる。

夜中に空港に着いたらその足で「店」に行き荷物を降ろす。これは目立たないようにするためである。かつて路上で売ってるときには、地元警察に賄賂を要求されたことがあった。コーヒーショップで商売をしていることが警察の知るところとなっていないわけではないが、何事も曖昧で一貫性に乏しい慣行がはびこっている以上、目立たないに越したことはない。コーヒーショップのなかに「店」を出す方法を考えたのは、マラヤの女性と結婚したマナンギーのニーマ・テンジン（ムスリム名はアリ）である。今では、アリ自身とアリの娘および娘婿もコーヒーショップのなかに大きな売り場をもっている。アリは売り場だけでなく宿場も2件もっていて、それぞれを兄弟姉妹に管理させている。マットレスを敷いただけの宿場の寝床は2人が2ヶ月交替で共有しており、通常、その2人は売り場も共有している。兄弟だったり、親子だったり、従兄弟同士だったり、父と娘婿だったり、ときには単なる友達同士だったりもする。

アリの兄弟もクアラルンプール経由でペナンに行くマナンギーを自宅で受け入れている。一晚単位で宿泊料を支払う。朝食と夕食は大部屋でみんなと一緒にするが、これが女たちの収入にもなるのである。クアラルンプールでは昼食も出す。また同じ場所で店を出しているのだから、女たちが弁当と午後のお茶を出すこともできる。宿場と売り場は歩いて行ける距離なので、食事の世話は宿場の女性達が交替するのである。こうやって、マナンギー社会は経

費を節約し、同時に自分たちの口に合う食事を欠かさずにいられるのである。さらに、節約できる金額がたとえ小額であっても、重要なことは、【富が自分たちの社会から出て行かないこと】だというのが彼らの考え方なのである。

男たちが稼いだ富が共同体の外へ出ていかずに、マナンギー社会の女の手を介してカトマンズへ還流し、そして【マナンギー共同体内部で経済が循環】する。クアラランプールのマナンギーが意識的に外食を避けるのは、カトマンズから飛行機代を支払ってきた女たちが少しでも収入を得て、お金を持って帰らなくてはならないからだという。これはマナンギーが共有する【自らの共同体への配慮】である。自らの役割を果たすこと、互いにやりくりして折り合いをつけること、協力しながら一緒に働くこと、代わり番こにすること。マナンギーがいるところではどこでもこういったやり方が観察される。これこそがマナンギー経済の構造そのものなのである。そして、これが可能なのは、彼らガリスクをとることを厭わないからであり、同時に、常に自分達の共同体を維持すべく努力しているからなのである。

外部社会との関係の築き方も共同体内部の論理を適用して、地元の理解や支援を得たり、特別な配慮を得たりしている。要するに、彼らの内部論理が共同体内部で貫徹しているからこそ、外部へと関係を広げて行くことが可能になっているのである。とはいえ、それだけでは限界がある。その限界を越えるのが、地元女性との結婚なのである。

## II ひとつの土地での経済循環、そして地域と地域をまたぐ経済循環

### ③移動から定住へ

タイ最大の宝石取引地チャンタブリ (Chanthaburi)<sup>16</sup>で、マナンギーに宿をはじめ数々の便宜を提供しているスミスというタイ人がいる。スミスは痒い所に手が届くような便宜を図るだけでなく、贅沢なほどの設備を整えてくれるが、その経費はすべてマナンギーが彼に支払う法外に高い (13%!) 手数料で賄われていることをマナンギーは承知している。自分達の同胞ならば、このような手数料は取らない。だから、マナンギーでタイ人女性を妻にするレンチンはスミスの役割を果たして、スミスに替わろうとしているし、ビルマからタイに入る道中のタイ側の町メーソート (Mae Sod)<sup>17</sup>には文字通りチャンタブリでのスミスと同じ役割を果たすマナンギーのシリンがいる。彼の妻はビルマ人である。

マナンギーは1930年代から1950年代にかけてビルマで宝石の鉱山と売買に従事していた。

- 
- 16 タイ南東部、カンボジアと国境を接する町。この町の周辺には宝石を産出する地域があり、また、カンボジアからも宝石が流入するため、タイの主要な宝石卸売市場となっている。
- 17 タイ西部の国境都市。Mae Sot とローマ字化されることが多いが、ここでは原著の記述に従う。タイ中部のピサヌロークからタークを通り、メーソートを経由し、小さな川を越えてミャンマー (ビルマ) 側に入るとミャーフディ、さらにその先を西に進むとミャンマー南部の港湾都市モーラマインに至る。このルートは、タイとミャンマーの間の主要交通ルートの一つ。

インドの北東部からビルマへ入り、モゴとマンダレーで宝石を買ってラングーンで売る、あるいはイギリス船に乗ってペナンとシンガポールで売る。なかには宝石の採掘自体に携わる者もいた。これら宝石に関わって巨額の富を得たマナンギーは多い。しかし1962年、ネウイン軍事独裁政権が登場したのを機に多くが国外へ脱出した。豊かな宝石の埋った鉱山は閉ざされたままで、マナンギーはその富に気付いていたが、宝石はビルマ政府の統制下で外国企業と組んで採掘されてきた。政治状況の変化ゆえに、マナンギーは宝石へのアクセスを失ったのである。

今日、マナンギーは再び宝石の取引に携わっている。マナンギーが宝石を仕入れるのはチャンタブリだけではない。チャンタブリで週末の宝石卸売り市が終ると、彼らはタイの国境沿いであって宝石卸売り市のある町メーソートへ向う。そこで彼らはビルマの宝石を仕入れるのだ。マナンギーがビルマの宝石を扱えるのは、そこにビルマ女性と結婚したマナンギーのシリが【拠点】【拠所】となって彼らを迎えているからである。

マナンギー以外にネパールからビルマへ来た集団のなかに、ゴルカーリーと呼ばれる人々がいる。1816年以来イギリス軍の傭兵となったゴルカ兵のことで、「ゴルカーリー」とは彼らの自称である。土地が肥沃だったため、ゴルカーリーは家族を呼び寄せ、村全体がビルマに入植したところもあった。1930年代にマナンギーが宝石のことを知ったのは、ゴルカーリーからだった。当時、マナンギーはゴルカーリーの行くところなら、香港、シンガポール、マレーシアなどどこへでも行った。ゴルカーリーのおかげで遙か彼方の土地を知ることができたのである。マナンギーが行商する他のアジアの共同体と異なるのは、植民地勢力を利用して共同体版図を広げていったことである。マナンギーとゴルカーリーの歴史は互いに重なり合っているのである。

1962年のビルマの軍事クーデターの後、ほとんどのマナンギーはビルマから逃げたが、ゴルカーリーは残っていた。国境を渡ってタイ側に出ると、タイで働いたお金でビルマの暮らしを支えたり、タイとビルマを行き来したり、タイに定住してフンディ<sup>18</sup>でビルマに送金する者もいた。タイ政府はたびたびゴルカーリーに恩赦による特別滞在許可を発行している。

数十年後、再度マナンギーとゴルカーリーが出会ったのは、メーソートの地で、宝石の売買を通してだった。

マンダレー北部のゴルカーリーの村は、村をあげて宝石の取引に従事していた。村にはビルマ人は皆無で、ゴルカーリーしかいない。かつては豊かだったが、今では農業だけで食べていくのは大変で、タイに出稼ぎに行きながら一方で宝石取引に携わる。60才のゴルカーリー

18 フンディ (hundi) とは、一種の送金システム。南アジア系の人々が伝統的に発達させた方式で、いくつかのパターンがある。現代の国際的な銀行取引中心の世界では、しばしば「地下送金」「地下銀行」等の汚名を着せられるが、南アジア系の人々には良く知られた送金方法であり、現在でも広く用いられている。

の女性の話によると、彼女の息子は国境まで宝石を運ぶ。彼はどこで宝石が手に入って、どこで売れるかを知っている。宝石を運ぶには 8～10 人が一緒に移動する必要がある、かつ、道を知っている手配師に案内料を払う。略奪や殺戮に合わないためである。宝石はありとあらゆるところに隠し持つ。服の裏に小さな袋を縫い付けて隠したり、バスのタイヤに隠すなど、人の移動と同様、宝石の輸送にも特別の知識が必要なのである。

メーソートの国境で、宝石はタイ側の行商人に引き渡される。ビルマ人、ゴルカーリー、タイ人も少しいる。ひとり 10 パーツで国境の通行証が貰える。Thaungyin 河<sup>19</sup>を渡ってタイに入ると、メーソートに一日滞在する。朝の 8 時半と夕方の 4 時半に国境が開くからである<sup>20</sup>。メーソートではビルマ語もタイ語もどちらも通用する。メーソートの宝石市場の歩道でマナンギーはゴルカーリーとビルマ人から宝石を仕入れる。

チャンタブリと違って、メーソートの宝石はほとんどが手頃な大きさで、それほど磨き上げられてはいない。高価なものや小粒のものは混ざっている程度なので、経験のあるマナンギーなら鑑定台なしで取引できる。鑑定台のある店は宝石市場通りの両側に並んでいる。そこで鑑定台を借りているのはシリンだけである。鑑定なしの宝石の取引では、信頼と経験だけが頼りとなる。

その宝石は誰が持っていたものか。それが信頼に足るのはどういう理由からか。数多くのビルマ人とゴルカーリーの行商人のなかから、マナンギーは信頼できる行商人を選ばなくてはならない。そういう知識と情報を一番多くもっているのがシリンなのである。彼はメーソートに住んで 8 年になり、妻はビルマ人だ。工房をもっていて、原石も加工したジュエリーもバンコクに卸している。マナンギーがタイ語とネパール語でゴルカーリーやビルマ人と話しているとき、シリンは誰がどうだという情報を追加する。彼の妻が常にビルマ人の行商人と接しているが故の貴重な情報である。

シリンと彼の妻は、マナンギーとゴルカーリーの関係のあり方の変えたのである。その結果、両者はただ親しいだけでなく、質的に異なった関係を築くことになったと言える。このようにして、ビルマの山岳地からメーソートを經由してマレーシアやシンガポールへと宝石が取引されていく。ちょうどその逆方向に外貨が流れて、タイ経由でビルマを潤すことになる。

マナンギーが移住先の地元女性と結婚し始めたのは 1950 年代で、まだ 2 世代しか経っていない。チベットでは若干そういう例があったらしいが、あまり記録がなく、インドでは決して地元女性とは結婚せず、ネパールから妻を連れて行っていた。シロンには通称マナンギー

19 モエイ (Moei) 川の別名。メーソート周辺でタイとミャンマーを隔てる国境。

20 これは著者の調査時点。2012 年の夏、高田がメーソートを訪問した際には、両国の交通はほぼ一日中 (昼間一杯) 行われていた。

横町<sup>21</sup>がある。男たちがビルマやマレー半島に出かけているあいだ、女たちがまとまって住んでいたからだ。

外部の女がマナンギーの妻となることは歓迎されるが、マナンギーの女が外部の男と結婚することは歓迎されない。前者は共同体の成員が増え、後者は減ると考えられるからだ。というも、マナンギー男と結婚した女はマナンギーとみなされるが、マナンギー女と結婚した男はマナンギーとはみなされないからである。外国人の夫には世帯ごとに担わなくてはならない共同体の義務を担うことができない。これがその理由である。

したがって、マナンギー社会では、女の子が外部の男と恋に落ちないように、年頃の女の子がマナンギーの男と交流する機会を頻繁に設ける。女の子は周囲にマナンギーの男しかいないような環境で育てられると言ってもいい。外国人の母親をもつマナンギーの娘はとりわけマナンギーの男を選ぶ傾向にある。つまり、マナンギーとは誰のことか？ この「定義付け」を工夫することで、外部の者を迎え入れ、文化的多様性を容認しているのである。

最後に、外国人の妻と結婚して離婚したテンジンと、テンジンの父親の人生を紹介しておく。

タイ女性と結婚して離婚したテンジンの場合、2人の結婚によって2つの経済が緊密に交わり合い、切っても切れないものとなっていたので、離婚してもその関係が続いている。テンジンの元妻はマナンギーがタイに販路を見出そうとするとき、長期滞在に必要な労働許可をとるための身元引き受け人になることを厭わない。テンジンの娘が所有するバンコクの店はマナンギーがバンコクに来ると必ず寄る場所となっており、そこでマナンギーはテンジンと夕食を共にし、タイで何か困った事があると彼に庇護を求める。テンジンの電話番号は、マレーシアとシンガポールのマナンギーの宿場の壁に貼ってある。マレーシアとシンガポールに行くと、テンジンはホテルではなく必ず皆と一緒に宿場に泊まる。彼自身が【拠点】【拠り所】となっているのである。

そのテンジンには、ネパールに育ての父（母の再婚相手）、ビルマに実父がいる。テンジンの実父は宝石の取引をしようとビルマに行った。しかし、宝石の取引が終了してからも数十年の間そこに居続けることになった。家族ができていたからだ。彼は1950年代以来ずっと宝石の取引をしていたが、1962年にビルマで軍事クーデターが起ると、行方不明になったという。テンジンの母親は再婚し、さらに息子を2人産んだ。30年経って、父親は初めてネパールへ帰る機会を得た。そのときのことを母親はユーモアを混じえて話す。「家に入って来た時びっくりしてね。わからなかったんだよ。自信がなくなってね。あんた？あんた、,、なの？ってね。」何十年も後の再会で、夫とは思えなかったという。

21 1990年代末に同地を筆者（高田）が訪れた際、シロン市内にネパール人が集中する地域があることを確認したが、それが通称「マナンギー横町」かどうかは不明。

ビルマに住みついてビルマ人とのあいだに息子が一人いたので、実父はネパールを訪れた後ビルマに帰っていった。彼は第一線を退いてマンダレーの近くの小さな町で晩年を過ごしていた。ラマ<sup>22</sup>になっていたのである。テンジンは以後、仕事でチェンライ (Chiangrai)<sup>23</sup>に行くとなつたび、実父と母親違いの弟に会いに行く。治療でタイに来る父親と、店を手伝いにくる弟たちは、彼にとっては育ての父 (母の再婚相手) と父親違いの弟たちなのである。

マナンギーの人生を形作っているのは、親族の繋がりや仕事の機会、そして政治状況である。どこに住むか、そしてどこを自分の家だと思えるかが、このようにして決定されていく。親族の繋がりや経済面だけでなく、様々な側面での助け合いに発展するため、これがマナンギー社会を国外へと広げて行くことになった。どこへ、どんなふう広がっていくか、マナンギーたちが個々に計画して動いているわけではないので、必ずしも予測できるわけではないが、彼らは何十年も離れていた後でも繋がりや回復できる。【移動と結婚を通して結びつきを形成】して行くうえで、マナンギーの男と結婚したいろんな土地の女たちの役割は極めて重要なのである。マナンギーの夫の人脈と、妻がもつ現地の人脈が統合されるからだ。

(続く)

## 2. 解説に代えて

以上が『市場と僧院』前半部の紹介である。ここには商業者としてのマナンギーの姿が実に的確に捉えられている。以下では、こうしたマナンギーたちの姿や行動を、高田・山本 [2011] や高田 [2012] が捉えたタイのネパール系の人々と比較しつつ、簡単な検討を加えることで解説に代えたい。

### i) アイデンティティと帰属

『市場と僧院』の「はじめに」では、非常に興味深い事実が明かにされている。マナンギーが (ネパール人全体も?) インドのパスポートを保持していた。そのため、「インド人」に紛れることで注目を集めることが避けられた、と示唆されているのである。そのすぐ後に「大英帝国の臣民を偽装していた」とあるところをみると、時代は恐らくは英領インド期であろう。ネパールは18世紀後半に全土を統一後、イギリスとの戦争に敗れた時期はあるものの、基本的には独立を維持してきた。そのネパール人がインドのパスポートを保持していたのは、いかなる理由によるものか。詳細は不明だが、何らかの手段でインドのパスポートを入手できたのであろう。いわば「偽装した」インド国籍を基に、マナンギーたちは東南アジア各地

22 チベット仏教の僧。

23 チェンマイよりもさらに北に位置する小都市。「黄金の三角地帯」に極めて近い。

へ移動と定着を繰り返していたようである。ここには英領インド時代のネパール（人）に対する特別の取り扱いが影響しているように思われる。Ⅱ－③に登場する「ゴルカリー」<sup>24</sup>は、英領時代からネパール人でありながら、英領インドを初めとする英領植民地各地で活躍してきた。また、インド独立後も、インド軍の一部としてインドの防衛にあたる例があったことは、プーケットの仕立屋が、彼自身の父の生活を語る中で詳細に明かしている〔高田2012〕。ともあれ、明らかなことは、マナンギーたちはネパールという国家に縛られることなく、必要な場合にはインド国籍を利用してでも、各地を自由に移動することを選好してきた、との事実である。

類似の傾向は、彼らの結婚と定住の面でも見られる。移動先で結婚・定住しつつ「彼・彼女ら自身が拠点／拠り所となり」活動する（はじめに）。「土地に根付いて姻戚関係を結ぶ」（Ⅰ－①）。こうしたことが歴史的に古くから一般的であったわけではないようだ。Ⅱ－③には「マナンギーが移住先の地元女性と結婚し始めたのは1950年代で、まだ2世代しか経っていない。チベットでは若干そういう例があったらしいが、あまり記録がなく、インドでは決して地元女性とは結婚せず、ネパールから妻を連れて行っていた。」との記述がある。つまり、第2次世界大戦後、さらに言えば英領インドが分離独立する形でインドとパキスタンに分かれ、旧英領ビルマ＝新生ビルマ（現ミャンマー）との間でも自由な往来が難しくなった、との時代背景を考える必要がある。かつてのような自由な往来が難しくなる中で、ビルマに移動したマナンギーたちが、東南アジア方面各地への移動・往来を確実なものにするため、従来の婚姻パターン（基本的にはマナンギー同士の間での婚姻）を変化させたのではないか。具体的には、現地の女性を親族関係の中、より広くは「マナンギー」というカテゴリーの中に組み込むことで、マナンギー・ネットワークを確実なものにしようとした、と考えられないだろうか。

ただし、その際には条件がある。同じくⅡ－③には、「外部の女がマナンギーの妻となることは歓迎されるが、マナンギーの女が外部の男と結婚することは歓迎されない。前者は共同体の成員が増え、後者は減ると考えられるからだ」とある。この記述からすると、基本的にはマナンギーは「父系原理」を保持し、男性が非マナンギー女性と結婚した場合には、たとえ異民族であっても親族組織原理を拡張的に適用することで、その女性は「マナンギー」カテゴリーに組み込まれるのに対し、マナンギー女性が非マナンギー男性と結婚した場合には、相手のカテゴリーに属すとみなされる（少なくとも「マナンギー」カテゴリーからは排除される）、ということであろうか。これは「外国人の夫には世帯ごとに担わなくてはなら

24 狭義には「ゴルカ兵」、広義には、対外的にネパール・ナショナリズムを強調する形で「ネパール人」そのものを指して使われることもある。日本語の「大和魂」というときの「大和」に近いニュアンス。ここでは狭義の「ゴルカ兵」とその家族・子孫を指しているものの、広義のニュアンスも多少含みつつ用いられているように筆者（山本）には思われる。

ない共同体の義務を担うことができない。これがその理由である」(Ⅱ-③)とあるように、共同体の義務の遂行能力ゆえであるという<sup>25</sup>。すなわち、「マナンギー」カテゴリーを無条件に拡張するのではなく、マナンギー男性が移動先で定住し、他のマナンギーに便宜を図ることが可能なように、現地女性と結婚した場合に限って「マナンギー」カテゴリーを適用するように変化が生じた、ということであろう。この変化が意図的なものであったのか、はたまた、現地女性との結婚が生じたという事態の発生を受けての後付的なものであったのか、その点は不明であるが、おそらく後者の説明が的を射ているであろう。なぜなら「マナンギーの人生を形作っているのは、親族の繋がりと、仕事の機会、そして政治状況である。どこに住むか、そしてどこを自分の家だと思えるかが、このようにして決定されていく。親族の繋がりはお金の面だけでなく様々な側面での助け合いに発展するため、これがマナンギー社会を国外へと広げていくことになった。どこへ、どんなふうに広がっていくか、マナンギーたちがここに計画して動いているわけではないので、必ずしも予測できるわけではない」(Ⅱ-③)とあるからだ。

しかし、この拡張適用にも実は限度があることを別の記述が示唆する。同じⅡ-③では、先の記述に続き、「マナンギー社会では、女の子が外部の男と恋に落ちないように、年頃の女の子がマナンギーの男と交流する機会を頻繁に設ける。女の子は周囲にマナンギーの男しかいないような環境で育てられると言ってもいい。」との部分が続く。つまり、男性には非マナンギーとの結婚を認めても、女性には非マナンギーとの結婚そのものが生じにくいように誘導する。その結果、マナンギー男性もマナンギー女性を選ぶことが一般的になると思われる。さらに、「外国人の母親をもつマナンギーの娘はとりわけマナンギーの男を選ぶ傾向にある。」との記述が続く。つまり、非マナンギーの母を持つ「混血」のマナンギー女性は、薄まった「マナンギー」性を再度強めるために、結婚相手としてマナンギー男性を選好する(ように仕向けられる?)のである。

以上の考察をまとめて言えば、マナンギーたちは移動と定住、交易と往来を確実にするために一部のマナンギー男性が非マナンギーの現地女性と結婚することを容認し、それらの女性と、その女性との間に生まれた子供たちを「マナンギー」カテゴリーに組み入れることを容認した。しかし、それはあくまでも便宜目的から「一部の」男性に限られた事態であり、基本的にはマナンギー同士が結婚することで「マナンギー」カテゴリーを維持・強化しようとしている、ということになる<sup>26</sup>。

国籍の面で(少なくとも一時期)見られた融通の利く行動、さらには結婚と親族カテゴ

25 「共同体の義務」の詳細は論文の後半部分で明らかにされている。

26 この解釈が正しいとすれば、Ⅱ-③で著者が「つまり、マナンギーとは誰のことか? この「定義付け」を工夫することで、外部の者を迎え入れ、文化的多様性を容認しているのである。」と主張しているのは、やや行き過ぎた表現のように思われる。

リー、地域カテゴリーの面で見られた「マナンギー」カテゴリーの拡張適用、これらは商業民としてのマナンギーが、アイデンティティと帰属の面で示す「柔軟性」として非常に興味深い。しかし同時に、彼らは「マナンギー」カテゴリーを維持し、強化する方策を取ることにも忘れないのである。こうして、一方で交易に生きる集団マナンギーがグローバルな展開に柔軟に対応する戦略を取りつつ、他方でマナンギー集団の特性は維持する、この相反する方向性を同時に成り立たせているのである。

## ii) マナンギー・コミュニティの変容

マナンギーは、かつてチベットとインドを結ぶ交易に従事していたが、その当時はマナン渓谷での居住が基本であったようだ。しかし、現在のマナンギー・コミュニティは大きく変容を遂げていることがうかがえる。例えば「はじめに」では、「首都カトマンズで、祭事や年中行事を組織して、労力と資力の両方を確保する。その目的は徳を積むことであり、家族の繋がりを再確認してさらに強化する」との記述がある。これはカトマンズを中心に多数のマナンギーがマナン渓谷の外に暮らしていることを示唆する。また、I-①では、「今日、マナンギーの大多数はマナン渓谷に住んでいない。さらに、かなりの人々がインド、タイ、マレーシア、シンガポールなどの国外に出ている。」との記述がある。つまり、マナン渓谷に残るのは一部だけであり、多数が首都カトマンズに移住し、その上、かなりの数の人々がインドや東南アジア各国に分散居住している、ということになる。このようにコミュニティが変化した中で、彼らがどのようにコミュニティをコミュニティとして成り立たせているか、マナンギー・アイデンティティを維持しているか、それを明らかにすることが著者の意図でもある。その一部の戦略は、上記の結婚慣習の変化であるが、より包括的に見ると、タイトルの『市場と僧院』が示唆するように、彼らの信仰生活が大きく関わる。この点については、次回の資料紹介の際に、改めて取り上げることにしたい。ここではとりあえず、どのようなプロセスによってこのようなコミュニティの変容が生じたのか、その1点に絞って考えてみたい。

当初、コミュニティ変容のきっかけとなったのはイギリスのチベットへの進出と、それに続く交易ルートの変化であったように思われる。イギリス進出以前、彼らはチベットからマナン渓谷を経てインドへ往来する荷の中継交易の担い手であったようだ。それがイギリスのチベット遠征と共にシッキムからチュンビ渓谷経由のルートが拓かれ、そちらが主要ルートに変わったことで、マナンギーたちはマナン渓谷に留まって中継交易を行なうことをあきらめ、自分たちがマナン渓谷を出て新たな交易の機会とルートを模索する。その具体的な現れが、「インド、ビルマ、マレー半島へと進出する」ことであり、「マラヤへの貿易拡大など」、または「デリーとジャンムー・カシミールでの仲介業」展開であった（I-①）。さらに、

「1930年、ビルマのモゴの宝石鉱山とマンダレーのネパール移民およびメイミョーのゴルカキャンプの話聞きつけたマナンギーは、イギリス船でカルカッタからラングーンへ渡り、イギリス支配の拡大と歩調を合わすように、カルカッタからラングーン、ペナン、シンガポール、マドラスにまで足を伸ばしてカルカッタへ戻って来た。」(I-①)。つまり、イギリスのチベット進出と交易ルートの変化が、彼らに従来のチベット交易依存の生活に見切りをつけさせ、インドやビルマへの進出を開始する契機となった。さらに、ビルマ北部でゴルカーリーと出会ったことが、さらにその先の東南アジアへと目を向けるきっかけを彼らに与えた、ということのようである。こうした展開の結果、彼らはネパール国内だけでなく、インド北部(デリー、カシュミール等)から北東部(アッサム、メガーラヤ等)、ビルマ北部(マンダレー、モゴ等)、さらにはタイ各地(チェンマイ、チェンライ、メーソート、プーケット等)、マレーシア(クアラルンプール、ペナン等)、シンガポール等々に、その居住範囲を広げていった。つまり、商業民族である彼らが、従来の交易ルートを失うことで、逆に新たな商業ルートの模索を続ける中から、彼らの活動範囲が広がり、その結果、彼らのコミュニティが変容した、と見ることができそうである。

### iii) 他民族、他国民との共生

この点に関連して非常に興味深いのは、彼らがマナンギー・アイデンティティを保持しつつ、他民族、他国の人々と「ウィン・ウィン」的な共生関係を作り上げていることである。それが最も顕著なのはゴルカーリーとの関係であろう。

II-③ではゴルカーリーにかなりの紙幅が割かれる。それは「マナンギーとゴルカーリーの歴史は互いに重なり合っている」からに他ならない。イギリスが植民地を拡大するのに並行して、「ゴルカーリー」(イギリス軍の傭兵となったゴルカ兵たちの自称)たちがゴルカ兵として英領ビルマ北部に進駐した。その結果、(マンダレー周辺の)「土地が肥沃だったため、ゴルカーリーは家族を呼び寄せ、村全体がビルマに入植したところもあった」。そこに新しい活躍の場を求めているマナンギーたちが訪れる。「1930年代にマナンギーが宝石のことを知ったのは、ゴルカーリーからだ」。こうして新たな交易の可能性を見出したマナンギーたちは、ゴルカーリーと一種の共生関係を作り出す。「当時、マナンギーはゴルカーリーの行くところなら、香港、シンガポール、マレーシアなどどこへでも行った」との記述は、ゴルカーリーとマナンギーとの風変わりな共生関係を示唆する。つまり、英領植民地となったアジア各地をイギリスの指示で雇い兵であるゴルカ兵が転々と移動してゆく。すると、その後を追いかけるかのようにマナンギーが交易の機会を求めて移動してゆくのである。その結果、マナンギーたちは「ゴルカーリーのおかげで遙か彼方の土地を知ることができた」のだった。結局、間接的にだが、マナンギーたちは「植民地勢力を利用して共同体版図を広げていった」

非常に稀な商業集団，ということになる。

さらに，マナンギーたちにとってゴルカーリーは別の面でも重要な意味を持った。それを示すのは次のような記述である。「1962年のビルマの軍事クーデターの後，ほとんどのマナンギーはビルマから逃げたが，ゴルカーリーは残っていた」（Ⅱ-③）。これは恐らく，マナンギーたちの多くが交易目的の移住者であったのに対し，ゴルカーリーたちは入植者として定着し，ビルマ国籍を取得していたからであろう。筆者たちがバンコク在住のビルマ人たちから直接聞いた話には，独立当初のビルマ軍に加わり重要な役割を果たしたことを評価されたゴルカ兵たちが多数いた，とのエピソードが含まれていた。こうしてビルマ北部に残ったゴルカーリーたちは，その後「タイとビルマを行き来したり，タイに定住してファンディでビルマに送金する者もいた」。その結果，彼らの活動を追認する形で「タイ政府はたびたびゴルカーリーに恩赦による特別滞在許可を発行」したという。他方，一度はビルマからネパールに引き上げたマナンギーたちだが，その一部は再び外を目指すようになる。軍政で入り込むことが難しいビルマを避け，彼らは直接タイへ向かった。その結果，「数十年後，再度マナンギーとゴルカーリーが出会ったのは，メーソートの地で，宝石の売買を通してだった」。なぜなら，マナンギーたちがビルマを去ってネパールに戻った後，「マンダレー北部のゴルカーリーの村は，村をあげて宝石の取引に従事していた」からだ。理由は，「かつては豊かだったが，今では農業だけで食べていくのは大変で，タイに出稼ぎに行きながら一方で宝石取引に携わる」ようになっていたのである。こうして，マナンギーとゴルカーリーは，かつての軍人と民間人という関係から，今度は商売上のパートナーとして，再び共生を始めるのである。その結果，両者は，Ⅱ-③でメーソートに在住するシリンの話に出てくるように，「ビルマの山岳地からメーソートを經由してマレーシアやシンガポールへと宝石が取引されていく。ちょうどその逆方向に外貨が流れて，タイ経由でビルマを潤す」という流れの媒介者となったのであろう。

マナンギーたちは，ゴルカーリー以外にも多くの人々と共生的関係を築いている。例えば，「ペナンではシク寺院に泊まれる」（Ⅰ-②）が，これは彼らが自ら進んで寺院の掃除などをするからだという。または「マレーシアの The Ai Goh Hotel」。ここでは常時往来するマナンギーたちのためにホテルのオーナーが常に特定の部屋（Room No. G）を用意している。さらには，彼らは各地で現地女性と結婚し，そこに定住するが，それも現地の人々との良好な関係を物語るものであろう。この点を著者は，「武力で土地の人々を支配する」ヨーロッパ人と対比し，マナンギーたちは「土地の人々とよき関係を結ぶ」と指摘する。

とはいえ，マナンギーたちは，やはり基本的には他所者（＝非マナンギー）よりもマナンギー仲間を信用し，頼ろうとするようだ。この点は，「交易に際して，行商人に様々な便宜を提供する土地の人間」を示す「フンドック」を論じた部分（Ⅰ-①）で明らかにされている。

る。すなわち、マナンギーたちは、(1)「自分たちの中からフندوقクの役割を果たす者を出し、(2)「土地に根付いて姻戚関係を結」び、(3)「マナンギー共同体の相互依存関係に包摂され、かつその関係を強化する」、という。つまりは可能な限り自分たちの仲間内でネットワークを完成させる方向で努力する、ということであろう。

#### 参 考 文 献

- 重松伸司, 2012, 『マラッカ海峡のコスモポリス, ベナン』大学教育出版会。  
高田峰夫・山本真弓, 2011, 「バンコク在住『ビルマ系ネパール人』に関する覚書」, 『広島修大論集』51-2, pp. 193-208。  
高田峰夫, 2012, 「ネパールからタイへ：現代の移住第1世代一ブーケットの仕立屋の事例一」『広島修大論集』53-1, pp. 211-233。